

第四句集

卒寿を迎えて

桜鯛

中田みなみ

今春卒寿を迎えたとは思えぬ瑞々しさ、大らかさ。好奇心に満ちた眼差しでまっすぐ本質に迫る、中田みなみさんの世界は自然体で斬新である。

滴
り
や
こ
の
一
瞬
に
誰
か
消
え

川
砂
に
腹
を
冷
や
し
て
蛇
の
ゆ
め

庖丁を林檎に当てて雨かなと

鳥瓜世を怖るかに開きけり

東京の雪柔かし草城忌

大根が引き合ふ力出しにけり

當り前のやうに咲きをり返り花

桜守今年も同じ樹齡言ふ

霾やうしろ歩きの羊飼

いのちいつまで陽炎に立ち止まる

気まぐれな雨に日の射す青山椒

大いなる海よ空よと夏帽子

牛の舌鼻にとどけり雲の峰

黒は雄赤は雌とし金魚買ふ

恐るおそる下げたる金魚袋かな

ネクダイを外して覗く金魚鉢

金魚鉢憂きことをまた増やしたり

母の日の針ゆつくりと花時計

走
る
子
を
撮
ら
ん
と
走
り
秋
高
し

幼
き
ら
に

椎
の
実
炒
る
腹
凹
ま
せ
て
飢
ゑ
語
り

抜
く
る
ほ
ど
天
高
く
晴
れ
も
の
忘
れ

原
爆
忌
眠
り
の
な
か
を
水
流
れ

海鳥の河へ来てゐる盆の入り

終戦日國といふ字は略さずに

耳鳴りはあの八月の蝉しぐれ

赤き緒の下駄が踊りを恋ふるかな

抗はず生きて来しごと踊りけり

糊抜けし踊り浴衣となりにけり

妹いまも叱り易くて蒸し芋

鯉浅く泳ぐ日和や七五三

七五三ビーズの指輪忘れずに

晴るる日は新宿見ゆる掛大根

抱く犬に愛されてゐる日向ぼこ

あの顔の出る徳利とっくりのセーター編む

数へ日や身のうちにある砂時計

肥料入れ葉牡丹なんとなく笑まふ

クリスマス雀に麴麴の大き過ぎ

トラックに深き睡りの毛糸帽

行く年の墓地の下より電車の音

年の市髭を打ち合ふ槽の海老

寒き日やつくづく魚のまばらな歯

囁やけふを始むる目を開けて

芽光りの楯山わたる斧こだま

啓蟄や石屋のずらす黒御影石

春障子着替へて巫女となりゆけり

うつとりと甘茶かけられぬ給へり

花ぐもり納骨堂のエレベーター

春愁や貝が小さな蝦を吐き

沖を見る足の大きな合格子

春休み確か納戸に釣道具

略歴

中田みなみ (本名 中田 幸子)

俳人協会会員

大正14年 東京に生まれる

昭和41年 作句開始

昭和49年 稲賞受賞

昭和58年 第1句集「菊菊酒」刊行

昭和60年 「蛙」同人を経て故細川加賀主宰の「初蝶」に参加。
離去後、伊藤通明先生の「白桃」に入会。

平成3年 白桃賞受賞

平成8年 第2句集「燈芯」刊行

平成15年 第3句集「素描」刊行

同年 柴田佐知子主宰の「空」創刊にも同人参加。現在に至る

平成27年 「白桃」主宰病のため一月終刊

住所 〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷4-6-2

電話 03-3482-5771 FAX 同

句集 桜 鯛

平成27年9月20日発行

800円(税込)

中田みなみ

芝俳句会

竹中印刷

春
芝
居
連
河
貫
く
街
に
来
し

空
ら
堀
の
風
の
底
な
る
い
ぬ
ふ
ぐ
り